【ブック・レビュー】

中野卓・桜井厚編

『ライフヒストリーの社会学』

弘文堂，1995(平成7)年

石　原　豊　美

地域社会を踏査する中で，注目すべき信条や強烈なパーソナリティをもつ人物と出会いながら，本書の編者であり著者の一人でもある中野卓氏は，個人を社会学的に調査研究する必要性と意義を主張され，個人生活史の研究を精力的に進められた。

ライフヒストリーの研究においては，何よりも当の個人の個性的な，或いは場合によってはそこで生きる組織や社会の論理によって統制されたり，関係性の中におかれた生活史的な事実を汲み上げ，作品化することに力が注がれた。その過程で，生活史を口述する話者との関係における聞き手としての，また作品化する際の編み手としての，研究者の立場のとり方が問われた。収集された資料にもとづいて再構成された生活史の分析方法や，解釈をめぐっての議論もなされた。相異なる生活世界に身をおいたり ── 移民など ── ，種々の職業をもつ人の生活史が，彼或いは彼女らの置かれた歴史的社会的な文脈と共に研究された。

本書は，この研究分野を担う8人の先達が執筆したものである。

が，(原) 資料の扱いや研究対象との取り組み方に注意を払いすぎて，著者たちは，本書の全体的な (形式上の) 構成に関心を向けることを忘れてしまったのだろうか。標題紙に続いて，章は題と執筆者名のみで，節には算用数字の順と題の入る目次から本書は始まる。重複する論点を含みながらも基本的に各々独立した内容をもつ8つの章には，順が付されていない。また，目次から巻末の文献目録 ── 横書き，和洋別で各々五十音順及びアルファベット順に並べられている ── まで，一次元的に頁数がふられている。

ともあれ，各章毎に内容を簡単に紹介しておこう。

「ライフヒストリー研究の位相」(佐藤健二) では，ライフヒストリーが現代の日本の社会学の研究実践において確かな方法となっているのか，またライフヒストリーは社会学の実践が依るべき方法となりうるのか，という問いを掲げ，個人生活史の研究方法としてのライフヒストリーの実践に関わる論点が提起され説かれている。個人を，村と同様に複雑で重層的な存在とみ，フィールドとして自覚することの重要性，及び「生活」を，その主体である個人の意味づけを重視しつつ対象化すること，口述の方法の現在性，主体性，及び現場性という特質について，などである。

「インタヴューからライフヒストリーへ」(小林多寿子) は，インタヴューに基づいてライフヒストリーを構成する上での着眼点を提示している。インタヴュー場面で語られた話を，ライフヒストリーに編集する過程において，時間 ── クロノロジカルな時間，ライフサイクル的な時間，歴史的な時間，現在という時間，及び個人的な時間 ── ，話題の連鎖 ── 必ずしもクロノロジカルな時間に即して進まない ── ，話題の種類 ── 単一の話，反復のある話，ヴァージョンのある話 ── などが着眼点となる。ライフヒストリーは，語り手の語った，すでに解釈の入っている経験に聞き手がさらに解釈を加えた，二重の解釈を経た作品である。

「『口述の生活史』作品化のプロセス (大出春江) は，生活史研究のテキストとなった『口述の生活史』(中野卓編，御茶の水書房，1977年) がどのような過程を経て作品化されたかを解く。『口述の生活史』を編集した中野は，水島のコンビナート建設に伴う公害発生下での住民の意向調査を通じて，後に自ら

の生活史の話者となるおばあさんに関心を抱いた。中野によって行われたききとり調査の録音テープを起こして，質問の仕方や相槌の打ち方の特徴及び語りの特徴が分析される。話者の語りたいことを聞く（語らせる）姿勢に徹したことが，話者と，聞き手でありかつ編者となる研究者の共同制作を成功させた一つの骨子とされる。

「記述のレトリック」（井腰圭介）は，ライフヒストリーが，単なる資料の呈示にとどまらず，研究として完結したものであることを主張する。ライフヒストリー研究の著作内容が，記録＝「語られたまま」のかたちでの記述，注釈＝「時空の隔たりをもつ現実を通訳する知識を挿入し，異質な経験を緊密に連関させ，話者の目を通して読者自身をも包摂する『歴史的現実』を提示する仕組」（134頁），及び分析・解釈＝読者が引き出すべきものであり，研究者のそれは「記述と編集を通してライフヒストリーと一体化して埋め込まれてしまう」（135頁）に区別して捉えられる。

「ある告白の再解釈の試み」（水野節夫）は，自立を志向した一女性がその志向性を放棄せざるを得なくなる過程（フロイトの症例）の再解釈を行ったものである。共存する知的な面での自立志向性と家族的連帯性とによって方向付けられていたエリザベート・フォン・R嬢が，ウィーンへの移住と父親の死亡に始まるいくつかの生活体験を経て自立志向性を放棄し，家族的連帯性が希薄化し，エロス的親密さへの志向性の瞬時の顕在化と意識的な否定がなされる過程を示している。

「彷徨するアイデンティティ」（有末賢）は，稲垣尚友氏のライフヒストリーを分析している。22歳の折から放浪と模索を続ける氏のライフヒストリーを，世代論や文化論，運動論によるのではなく，ライフドキュメントの利用とききとり調査を通じ，旅，「原初」── 専業・分業のない生活 ── への憧れ，島での体験と逃亡者意識，職人仕事，もの書きといった軸に着目し，アイデンティティの揺らぎを鍵として捉えている。

「歴史的現実の再構成」（中野卓）では，口述の方法が，時々の記録によって一度固定されるならば，ますます読者の共感を伴うものとなり，歴史の再認識にとって有効であるとする。語られた事柄に対して信憑性を追求する態度を要求しながらも，夢の世界や宇宙観を含めた人々の生活世界を共感をもって理解し，人びとがこれまで生きてきた，なお光の当てられていない歴史を解明する学問的な意図が示される。

「生が語られるとき」（桜井厚）は，研究史上の代表的な事例を挙げながら，生の語りの特徴や，語られた事柄の現実性に関する論点を提起している。語り手が語るのは，しばしば時系列の順に位置づけられていない経験であり，研究者は調査時にも編集時にもこの問題に直面すること，生の様態 ── 暮らしとしての生，経験としての生，語りとしての生 ── を区別することの重要性などが説かれる。

さまざまなタイプのインフォーマントと向かい合う中で，ライフヒストリーを研究しようとする者は，たくさんの技術や知識や感性や創造力を要請される。殆ど無限定的に試されるといっても過言ではない。本書は，これを研究として進めていく上で遭遇しがちな論点や分析例を，豊富に示してくれている。

それにしても，何故それ程に「個人」なのか。同時代を異なる社会的位置づけのもとに共有していたり，意図して時空や保有する生活文化を超えようとしなければ接触することなく行き過ぎてしまいかねないインフォーマントに，ライフヒストリーを研究しようとする者は，どのようにアプローチし，把握し得た側面をどのようなものとして呈示することができるだろうか。つきまとってきがちなこのあまりにも基本的な問いに対して，本書は懇切な手がかりを与えてくれる。